転生物語

さよなら、

二宮敦人

Good Bye to
Tales of
Reincarnation

Atsuto Ninomiya

TO文庫

死にたいわけじゃない。生まれ変わりたいんだ。

寄せては返す波、白く浮かんでは消えていく泡を見つめ、僕――古狩（ふるかり）サトルは漠然と考えていた。

曇り空の下、寒々しい真冬の海に人影はない。砂浜に面した道路を時折、車が通るだけ。さっきまで犬と散歩していた女性は、不審げにこちらを窺いながら立ち去って行った。無理もない。革靴を砂に埋め、スーツに冷たい飛沫（しぶき）を浴びている僕は、どう見たって普通じゃない。

ふと空腹を覚えた。そろそろお昼時だろうか。何となくスマートフォンを手に取ったが、画面は真っ暗。勢いで切ったきり、怖くて電源を入れられないままだった。

今頃、会社では無断欠勤だと、騒ぎになっているだろう。上司の顔が思い浮かんで、思わずぶるっと震えが走った。あいつが怒る時はいつも同じだ。眉間と小鼻に皺が寄り、首と額がゆっくりと赤く染まる。休憩から戻るのが一分遅いと言って湯呑みを投げつけてくるような男だから、今回は机を蹴り倒していてもおかしくない。

ため息と共に座り込む。早くも後悔の念が湧いていた。

今からでも謝るべきだろうか。途中までは行くつもりだったんです。でも駅でどうしても足が動かなくなって、思わず反対方向の電車に乗ってしまったんです。最近成績が悪くて、追い詰められていたんです。そう言って土下座すれば、クビだけは免れるかもしれない。だけど……僕は、黙って首を横に振った。

あの会社に残って何になる。

給料は最低賃金なみで、残業代は出ない。にもかかわらず、仕事は休日でも容赦なく降りかかってくる。ゆっくりご飯を食べる暇もない。友達とは疎遠になるばかり、ましてや恋人なんか作れる気がしない。貯金もできず、家賃四万円で風呂とキッチンが共用のアパートに独りで住んで、楽しみと言えばコンビニで買うお菓子とお酒くらい。母さんから電話がかかってくるたびに、「元気で楽しくやってるよ」と答えては胸が痛む……それが一生、続くだけ。

ため息をついた。

どうして僕は、こんなことになってるんだ。

山の斜面には、木々に交じって高級感のある家が並んでいた。二階建てで、広いテラスがある。別荘だろう。お金持ちがたっぷり休暇を取って、家族や恋人と美味しいものでも食べているはずだ。

お金も、物も、時間の余裕も、ある人のところにはたくさんある。ない人のところには、何もない……砂に塗れた両の掌をじっと見た。

どうしてだよ。僕が何をしたと言うんだ。ずっと真面目に生きてきたじゃないか。

あるいは、それがいけないのか。

上司はいつも言っていた。もっと他人と戦え。客から金をぶんどって、他の社員を蹴落とせ。だからお前はいつまでもヒラなんだ。

嫌いな上司の嫌いな言葉だけど、たぶんこの世界の真実だ。受験でも就職でも営業でも、誰かを踏み台にして上を目指していたら、今頃あの別荘にいるのは僕だったかもしれない。

だとしたら、僕にこの世界は向いてない。

そうまでして偉くなろうとは思えず、かといって今の暮らしを受け入れる気にもなれず。ああ。どこか別の世界、別の人生に、生まれ変われたらいいのに。

呆然と海を見つめていた時、砂の中で何かがきらりと光った。ゴミだろうか。何となく気になって歩み寄る。コップの持ち手のようなものが砂から飛び出していた。摘まんで引っ張る。抜けない。周りを少し掘り、もう一度。今度は引き抜けた。

何だこれ。

それはちょうど、アラビアが舞台のお伽噺（とぎばなし）に出てくるようなオイル・ランプだった。汚れてはいるが、高級感のある金色。細密な装飾が施されていて、ずっしりと重い。

「もしかして本物の金かな？」

爪の先で泥をこそげ落とし、ハンカチで拭ってみる。磨けば磨くほど輝きが増す。面白くなってますます力を込めていると、やがてゴロゴロと音が聞こえてきた。雷雲でも出たかとあたりを見回しているうちに、はっと気がついた。音はランプの内側からだ。

「あ～、あ……」

まるで鯨が鳴くような、大あくびが響いた。目を丸くする僕の前で、ランプがぶるぶると震え始めた。咄嗟に押さえようと口のあたりに触れた時だった。

落雷のような音が轟き、ランプの蓋が吹き飛んで、大量の霧が噴き出した。すっかり白一色に染まった中に、時折緑や紫の光が瞬いている。尻餅をついた僕は、信じられないものを見た。

異国風の青年が腕組みをして、空中に浮いている。噴き出た霧に映像が投影されるように揺らぎ、中途半端に透けている。年齢は二十代後半くらいだろうか。背が高く、痩身で、肌は褐色。まつ毛が長く、髪も瞳も真っ黒だ。白いターバンを頭に巻き、上下が一繋がりの、ペルシア絨毯みたいな模様の服を着ている。指輪にネックレス、イヤリングに腕輪と、体のあちこちに宝石や装飾品をつけていた。

彼は僕を一瞥すると、流暢な日本語でつまらなそうに吐き捨てた。

「次の主はお前か」

「まさか、ランプの魔神……？」

「俺の名はビルカ」

ビルカは風船のように漂っている。

「神でも悪魔でもない。が、そう見えるのは否定しない。だから好きなように呼べ、主」

愛想の欠片もない。おそるおそる聞いた。

「あの、何か怒ってますか？」

「怒ってない」

大きく伸びをしながらあくびをして、ビルカはふわりと目の前に降り立った。と言って

も、足は地面に接していない。ただ同じ高さにいるだけだ。
「俺は寝起きが弱いんだ。朝から腹いっぱい飯を食う奴を見ると、吐き気を催すくらいだ」
「あ、僕もそうです」
「ほう、そうか」
ビルカは初めて、小さく微笑んだ。
「エンジンがかかるまで時間が必要なんですよね。冬の朝なんか本当に辛くって」
うんうん、と頷いてからビルカは僕を睨みつける。
「そんな話はどうでもいい。俺は無駄話が嫌いだ。さっそくだがお前の願い、叶えてやる」
「えっ。冬の朝を楽にしてくれる、ってことですか」
「違う。願いを秘めた心で、俺を起こしただろう」
「あ。別の世界に、生まれ変わる……」
それだ、とビルカは頷き、ぼやいた。
「いつの時代も、お前のような奴が引きも切らない。そのたびに俺は封印から解かれて付き合う羽目になる。さて、数えてみるか……少し待て」
ビルカは目を閉じ、両手の指を額に当てる。そして眉間に皺を寄せ、何か考え始めた。
すでに霧は晴れ、あたりの視界が戻りつつある。波も、雲も、行き交う車も、つい先刻と

何も変わらない。やがて目を開け、ビルカは言った。
「……一千百億人、というところか。ここ百年ほどでずいぶん増えたな」
「あの、何の話ですか」
ビルカは指を二つ折ったり、と思えば戻してまた三つ折ったり、そんなことを繰り返している。
「世界の累計人口だ……二人。約二十万年前に最初の奴が現われてから現在まで、それだけのホモ・サピエンスが、生まれては死んでいった。そのうち八十億ほどは現在も生きているが、多すぎだろ……む、三人。二人」
「何ですか、その二人、とか三人とかって」
「俺が一つ数えるうちに、四人ほど生まれ、二人ほど死んでいる。まあ、それはいい。ここからが重要だ、よく聞け。俺はこの一千百億人の誰にでも、お前を転生させてやれる。多少の条件付きでだが」
「えっ、誰にでも？」
「つまり一千百億通りの中から、望みの人生を選べるわけだ。理想の人生がきっとあるだろう。少なくとも今よりはマシな人生がな」
「本当だとしたら……凄いですね。候補が多すぎて選べなそうだ」
「俺が適当に見繕ってやってもいい」
「転生なんて取り返しのつかないことを、適当に決めないでくださいよ」

「心配するな。取り返しはつく」
　ビルカは冷めた目で続ける。
「転生した先で、やっぱり嫌だとなったら、いつでも元の体に戻せるんだ。また別の人間に転生すればいい。遠慮などせず何回でも試していいぞ。納得する人生に行きつくまで、付き合ってやる」
　だんだん不安になってきた。
「さすがに話がうますぎませんか」
　ふっ、とビルカは笑う。どこか邪悪な笑みだった。
「みな同じことを言う」
「何か、代償がいるんでしょうか」
「いらん、いらん。お前が差し出せるものになど、俺は興味がない」
「しかし……」
「まあ、嫌だと言うなら俺はランプに戻るから、蓋を閉じて海に捨てろ。そして会社とやらに戻れ。俺はどちらでもいい」
「いや、待ってください。もう少し聞きたいことがあります」
　僕はありったけの質問をビルカに浴びせた。彼は無愛想ではあったが、淡々と答えてくれた。
「つまり、今の知識や記憶を持ったまま、赤ちゃんからやり直せるわけですか」

「知識と記憶については持ち越されるが、赤ちゃんとは限らない。老人や、中年の可能性もある」

首をひねった僕に、ビルカが続ける。

「転生とは魂の引っ越し。現住者がいる物件には入居できない。すでに魂が抜けた肉体、要するに死体にしか、転生はできないのだ」

「えっ。それじゃまるで、ゾンビ……」

腐乱死体が土(ど)まんじゅうから這い出して来る様を想像したが、ビルカは否定した。

「そうはならん。魂が抜けた直後の、損傷の少ない体を狙うんだ。ついさっきまでは生きていて、今も生きている。それはつまり、生き続けているのと同じだろう。ある程度なら傷も修復してやるから、気をつければ長生きもできる。もともと王(スルタン)が、不老長寿を願って魔術師たちに作らせた秘法でな。そのあたりは心配いらない」

「移植手術みたいなものですね。でも、ちょうど良く魂が抜けた人なんて、そうそういないでしょう?」

「大丈夫だ。百年前の幽霊が現われるとか、ブラジルの幽霊が日本に出るとか、聞いたことあるだろう」

何の話だ。僕は首をひねる。

「ブラジルの幽霊は知りませんけど」

「魂には、時空を超える性質があるわけだ。それを利用する。お前の魂を『ちょうど良く

誰かの魂が抜けた瞬間』まで運んでいって、その肉体に放り込む。何百年前、何千年前に死んだ人物であっても、死にたてほやほやの体に入れるぞ」

突拍子もない話に、思わず瞬きした。

「タイムリープ、ってことですか。それって歴史が変わっちゃうのでは」

「多少はな。だがお前、生まれ変わりたいほど、この世界の居心地が悪いのだろう。そんなことを心配する立場か？」

「たとえば外国人に転生したとして、言葉は通じるんですか」

「言語を習得した死体に転生すればいい。腕っ節と同様、言語野は能力としてお前にも備わる」

「転生を途中でやめたり、何度もやり直したりしても……」

「好きなだけやってくれ。制約は、同じ体に繰り返し転生できないくらいだ」

一呼吸置き、僕はビルカをじっと見つめる。妖しい笑いを浮かべながら、彼は空中で頬杖をついていた。

「代償も、何もないなんて。うまい話にしか思えませんね」

「だろうな」

「ビルカさんは、どうしてこんなことをしているんです」

「背負った業、とでも言うかね……」

歯切れの悪い言葉だけで、ビルカは目を逸らす。ふと思いついて、僕は聞いた。

「なぜ、ランプの中に封印されていたんですか」
ビルカの理知的な目が、きらりと光った。
「前の主の仕業だよ。そいつは理想の人生を求めて、何度も何度も転生を望んだ。そのうちに精神を病んだ。飯が食えなくなり、悪夢にうなされ、全身をかきむしりながら放浪するようになった。このような思いをする人間が二度と現われないようにと、古いランプに俺を封じ、もろとも海に身を投げたんだ」
波音が、やけに鮮やかに聞こえた。
「なぜですか。なぜ、精神を……」
「さあな。俺はただ望み通りにしただけ。普通なら持ち得ない力だ、使っているうちに心のバランスを崩すんじゃないか。どんなに優れた道具であろうと、使いこなせない人間はいる」
ふふ、とビルカは遠い目をする。
「俺としては、せっかく力を貸すんだから幸せになって欲しい、そう願っているがな」
そこであくびをしてから、僕を見た。
「で、どうするんだ。やるのか、やらないのか」
僕はランプを眺めた。
よく見ると、蓋を膠(にかわ)か何かで接着した形跡がある。そして表面には、爪でひっかいたような傷がいくつも残っていた。

前の主に何が起きたのかはわからない。だが、全てを聞いても、やはりうまい話だとしか思えなかった。逃したら、二度とこんな機会は巡ってこないだろう。やめときます、元の生活に戻ります、などと言う気にはなれなかった。

「やります。僕は使いこなしてみせます」

ビルカは頷くと、己の指輪を一つ外して放った。ぽとん、と砂浜に落ちたそれを、拾うように顎で促す。

「転生の指輪だ。それをお前にやる」

右手の中指につけてみると、しっくりと馴染んだ。細い灰色のリングに、やはり灰色の米粒のような石が嵌められている。つけていてもほとんど気づかれなそうな、地味な指輪だ。だが、見つめていると石の表面に不思議な紋章が浮かび上がった。しばらく虹色に瞬くと、揺らめいてまた灰色に戻る。不思議な輝きで、神秘を感じさせた。

「転生先の希望はあるか？」

「徳川家康（とくがわいえやす）に転生したい、とか言えばいいんでしょうか」

「名前で言われても困る。大金持ちの一人息子とか、運動神経抜群の若い体にとか、そういう風に言ってくれ。なるべく具体的な方が希望に添いやすい」

なるほど。

「あるいは、環境でもいいぞ。南国だとか、大都会だとか。どんな世界かがわかれば、そこから探してやる」

少し考えてから、僕は口を開いた。
「僕は今の世界が苦手なんです」
ビルカは黙って聞いている。
「生きていくにはお金がいる。お金を稼ぐには他人と競争しなくちゃならない。そういうの、もう疲れたんです。遊んで暮らせる世界がいい」
「遊んで暮らせる、それから？」
「あ、流石に望みすぎですかね。ほとんど働かなくてもよい、にしておきます」
「どちらでも俺は構わない。好きなように望め」
「はい。じゃあ遊んで暮らせて、誰とも競わずにすむ世界。そりの合わない人とは関わらなくても良くて、仲のいい人とだけ一緒にいられる。そんな世界へ転生したいです」
「ふむ。当てはまる人生を探すから、少し待て」
「はい」
ビルカが目を閉じる。
言ってはみたものの、そんな人生、あるはずがない。僕は一人で苦笑いする。だが拍子抜けするくらい簡単に、ビルカは頷いた。
「……見つかった。さっそく行くか？」
「本当ですか」
「ああ。準備ができたら、その指輪に向かって念じろ」

「念じる……というと」
「強く意識すればそれでいい」
　言われたとおりにすると、石が突如として虹色の光を放ち、輝き始めた。
「よし。今、転生先の肉体の同じ場所にも、指輪が生成された。二つの肉体が繋がり、魂を転送する準備が整った」
　ビルカがぽん、と僕の背を押した。それが合図だった。
「行ってこい」
　石の光はますます強くなり、直視できないほどだ。ビルカの声が響く。
「いいか。帰りたくなったら、そう指輪に向かって強く念じろ。元に戻れる。不慮の事故なんかで死んだ場合も同じだ。指輪を嵌めている限り、魂は元の体に帰ってくる。転生先に満足して、もう戻りたくないなら、指輪を捨てて人生を全うすればいい。わかったな」
　ロケットのように加速する感覚が全身を走る。視界には虹色の粒子が満ちて、あたり一面から流星が吹き上がった。薄れていく世界の輪郭を見ながら、僕は心の中で呟いた。
　さよなら、生き辛かった世界。

第一章　楽園を捨てる理由（わけ）

はっと眼を見開いたとき、僕は水中にいた。
転生したんだ。ランプの魔神は本物だった。
ここはどこだ？
って、ちょっと待て。猛烈な濁流だ。押しまくられて、どちらが上かもわからない。いくらもがいても、深い水底に引きずり込まれていくようだ。
まさか、溺れ死んだ体に転生してしまったのか。何考えてるんだ、ビルカのやつ。このままじゃもう一回死ぬだけだ。
目の前で泡が逆巻き、青緑色の水の中、泥が吹き上げられている。息ができない。苦しい。鼻から、口から、水が入ってくる。気が遠くなっていく。そうだ、戻ればいいんだ。確か、ええと、指輪に向かって念じ……。
そこまでだった。
世界が闇に包まれ、僕の体からは力が抜けていった。

どれくらい時間が過ぎたのか。気がついた時には、河原で太陽を見上げていた。体には

一枚、獣の毛皮が布団のように載せられている。

まだ生きている。

転生してすぐに死亡という間抜けな結末は、避けられたみたいだ。己の体を触って、怪(け)我(が)がないかを確かめた。

よく日焼けした肌の、逞しい肉体だった。十八歳くらいだろうか。体はびしょ濡れで、腰巻きを一枚着ているだけだったが、寒くはない。

あたりはお風呂場のように暖かく、かなりの湿気だ。遠くで甲高い鳥の声が響き、花の香りが漂ってくる。熱帯植物園を思わせる光景の中、僕は立ち上がった。

見渡す限り鬱蒼(うっそう)としたジャングルが続いている。なんという重厚な森だろう。高層ビルのように背の高い木、戸建て住宅くらいの高さの木、また少し低い木、そして地面の近くに生い茂る小さな木……と何層にも森が重なっている。文明の気配は全く感じられない。

ここはもしかして、原始時代か？

遊んで暮らせる人生をリクエストしたはずなのに、どうしてこんなところにいるんだろう。話が違うんじゃないか。だんだん不安になってきた時だった。

ざばっ、と川で何かが跳ねる。

驚いてそちらを向いて、僕は目を離せなくなった。

若い女性が一人、そこに立っていた。

背が高い。僕と同じくらいはある。そして頭が小さく、均整の取れた日焼けした肉体は、

引き締まっている。これほどスタイルが良い人を初めて見た。濡れて艶めく長い黒髪を後ろで束ね、腰と胸に獣の皮を巻いている他は、何も身に着けていない。卵形の顔には整った眉とまん丸の黒目が並び、額から落ちた水のしずくが、染み一つない肌を伝っていく。

女性はふう、と息を吐くと、そのままこちらに向かってきた。手には木槍を握っていて、その先端には両手で抱えられるほどの大きな魚が突き刺さっていた。やがて僕と目が合うと、無表情のまま、こくりと一つ頷いた。

「あ、あの……」

僕はおそるおそる声をかける。

露出は多いものの、女性からいやらしい感じはしない。鹿や黒豹といった野生動物のような印象をまとって、彼女はそこに立っていた。

「あなたが、溺れている僕を助けてくれたんですか？　ありがとうございます」

口から出たのは日本語ではなく、知らない言葉だったが、詰まることもなくすらすらと話せた。

しかし女性は返事もせずに背を向ける。

ゆっくりと僕から距離を取り、砂利の上に魚を置いた。何をするのかと見ていると、枯れ枝を集めて手元で擦り合わせ始める。やがて、小さな火が起きた。慎重に息を吹きかけながら、さらに枯れ枝を突っ込む。みるみるうちに焚き火になった。石を積み、枝を渡して魚を吊るすと、時折ぐるぐると回転させながら焼き始めた。

いい匂いが漂ってくる。

どちらかといえば魚は苦手なのだが、たまらなく胃袋を刺激される。まるで焼き肉のような香りじゃないか。脂が滴(したた)り、じゅうじゅうと石の上で跳ねている。女性は機嫌良さそうに鼻歌を歌いながら、火加減を見たり枝で鱗(うろこ)を剥いだり、淡々と作業を進める。

やがて、女性が魚を火から遠ざけた。尖った石を見繕って手に取ると、魚を捌(さば)いていく。器用に皮を裂き、骨を除き、内臓を取り分ける。白い肉からは、ほかほかと湯気が立っていた。女性は魚肉をひとつまみして口に入れ……にっこり、笑った。

僕のお腹がきゅう、と鳴る。涎(よだれ)が垂れそうだ。

少し分けて貰えないかと一歩踏み出した時だった。女性は近くの大きな葉っぱを取ると、そこに魚肉をせっせと盛り、あたかも当然のごとく差し出したのだ。

「えっ。いいんですか」

魚肉と女性の顔を交互に見る。お礼に渡せるようなものは何も持ち合わせていない。だが女性はもう、僕には目もくれなかった。ただがつがつと魚を頬張っている。

僕は魚肉を、そっと手づかみで口に運んだ。一口噛んで、目を見張る。

うますぎる。

しっかりした噛み応え、柔らかくほぐれる身、噛む度に染み出る肉汁。鶏と牛とカニのいいとこどりをしたような。味付けもされていないのに、こんなうまい魚、食べたことがない。新鮮だからだろうか。

僕は夢中で魚をむさぼった。葉っぱのお皿から肉がなくなると、女性は嫌な顔一つせず、また新たに取り分けてくれた。

やがてあれだけ大きな魚が、すっかり骨と皮と鱗だけになってしまった。女性は最後にデザートのように、茂みから赤い実を取ってかじると、川で口をゆすぐ。そして焚き火を挟んだ向こう側に、幸せそうな顔で腰を下ろした。慌てて駆け寄って、僕は頭を下げる。

「助けて貰った上に、食事まで。本当にありがとうございます」

女性は何も言わない。目を閉じたまま、うっすら微笑みを浮かべて座っている。解いた黒髪が綺麗だった。

「僕は古狩サトルといいます。あなたは、ここに住んでいる人ですか。良かったらお名前を教えて貰っても？」

聞き取りづらかっただろうか。僕は頃合いを見て、心持ちゆっくりと話した。

「僕は、サトル、です。あなたは、誰ですか」

川はよどみなく流れ、木々の合間から心地の良い日が差している。黄色い小さな蝶が、ふらふらと飛んでいた。

「どうして無視するんです？　でも魚をくれたってことは、別に敵視されているわけでもない、のかな。あの、どうなって……え？　これって、まさか」

遠くで鳥の声がする。すう、すう、と女性は穏やかに、規則的に息をしている。僕は愕然と呟くほかなかった。

「寝てる……」

起きたら今度こそきちんと話をするぞ。そう固く決意する。

だが、こちらの意気込みにもかかわらず、女性はなんと夕方まで寝ていた。長い。思いつく限りの暇つぶしを試したあげく、最後は流れる雲を見上げてあれは象に見えるとか、パフェに見えるとか、一人で想像して過ごした。やがて雲は雲でしかない、と悟りの境地に至りつつあったとき、ようやく女性が目を覚ました。

むくり、と立ち上がり、眉間に皺を寄せて猫背になっている。眠そうだ。僕に一瞥をくれると、こくりと頷く。そしてふいと背を向け、歩き出した。

「あ、あのう。どちらへ」

返答はない。

「僕も、ついていっていいですか」

やはりない。

暗くなっていく森からは、何か得体の知れない動物の鳴き声が聞こえてくる。こんなところに一人にされたらたまらない。

僕は彼女の後を追った。反応はないけれど、追い払われもしない。そのうちに森の中に小屋が見えてきた。

樹をそのまま柱にし、蔓(つる)や枝などを使って組み上げられている。細くて硬い植物の茎を

並べた床、壁、天井。ちょっと激しい雨が降ったらそこら中から雨漏りするだろう。女性の後に続いて、梯子を登った。中は案外広くて、五、六人くらいは雑魚寝できそうだった。

女性は一角に陣取ると、槍を足と足とで挟んで、月明かりを頼りに穂先を締め直し始めた。後から入ってきた僕には目もくれない。様子を窺いながら室内を物色してみる。たくさんの道具があった。斧、槍、釣り竿、お椀……みな石、植物、あるいは骨で作られている。隅には動物の皮が重ねてあった。

「あの……ここはどこですか。今は西暦何年かわかりますか」

女性は無反応。いい加減、腹が立ってきた。こうなったら何としてでも、こちらに興味を持たせたい。

「キョーッ！」

奇声を上げて、両手を振り回してみた。女性はちらり、とこちらを見た。やや警戒した表情。だがしばらくして、どうやら危険はないらしいと思ったのか、また槍の微調整に戻ってしまう。

僕は息切れと共に座りこむ。一体どういうことなんだ。この独特の距離感が、ここでは当たり前なのか。

「あの、せめて名前くらい教えてくれませんか。勝手にあだ名をつけますよ、ヒルネスキーさんとか。それが嫌なら名前を教えてください、お願いします」

女性は額の汗を拭き、しっかりと固定された穂先を見て、満足げに頷いた。

「もしかして言葉が通じてない？　やけに無警戒だし……どうなってるの、これ。僕が悪人だったらどうするんです。いきなり襲いかかるとか、考えないの」

女性が懐に手を入れると、イチジクに似た形の果物がいくつか転げ出した。半分ほどを取り分けると、すっと僕に向かって差し出す。

「……ありがとうございます、ヒルネスキーさん」

外で、きいきいと声がする。女性はそっと暖簾を上げ、様子を窺って一つ頷いた。そして果物を一つ、僕に渡したのと同じように入り口のそばにおいた。猿だろうか、毛むくじゃらの手がにゅっと出てきて、掴み取っていく。

「あの、ヒルネスキーさん。僕、猿と同じペット扱い……じゃないですよね？」

女性は果実をかじり、喉を鳴らして飲み込む。僕も仕方なく口に運んだ。筋張っていて、小さな種がある。ふかした芋のような食べ応え。ただ、皮や実の香りはバナナそのものだった。もしかしてこれ、バナナの原始的な品種なのだろうか。

食べ終わると、女性は皮や種を、窓から外にぽいっと放り出した。そして体を伸ばして大あくび。

獣の皮を取って布団のように体にかけ、目を閉じる。が、ふと何かに気づいたように起き上がり、クンクンと皮の匂いを嗅いだ。無表情のまま「ンッ」と眉間にだけ皺を寄せた。その皮を隅に押しやり、別の皮を自分にかける。また別の皮を僕の方に一つ、ひょいと投げてくれた。

「何から何まですみません。ヒルネスキーさん」
寝る準備が終わってから、女性はこちらを向いた。
大きな黒い目で僕を見つめ、自分自身を指さす。そしてにこっと白い歯を見せて笑い、一言だけ口をきいた。
「メゾ」
そしてすぐに背を向け、横になってしまった。
「えっ」
突然のことに、僕はしばらく硬直してしまった。
「名前……メゾって言うんですか」
返事はない。ただ寝息だけが聞こえてくる。
まだ寝るのか、この人。

comment

さよなら、転生物語

転生という言葉から
得るイメージとは全く違う
思わず**息を飲むような人間ドラマ**。
生きることとは何なのか？
幸せとは何なのかを
この本は本当の意味で教えてくれた。

――TSUTAYA商品企画プロデューサー・栗俣様――

幸せってなんだ?!
現状に不満を抱く現代人が
望んだ人生に転生したら…
こんな人生!!と思っていたはずなのに…
今まで見えていなかったことが見えてくる。
一気読みしました。

――喜久屋書店　小倉店・藤田様――

ふと人生に疲れた時、
立ち止まる手段として〝転生〟があればいいな……。
3つの物語ごとに**それぞれ違う色の涙を流せる**、
私の知らない転生物語でした。

――紀伊國屋書店　梅田本店・宮本様――

自分以外の人生に転生出来たら幸せになれるのに…
転生した世界に触れたことで**自分の人生が愛しくなる**。心の底から「自分の人生を生きたい」と
震える希望を与えてくれる物語。

――ジュンク堂書店　名古屋栄店・西田様――

未知の現象に人はどう生き抜いたのか。
受け入れる者、立ち向かう者。生きようとする
人の強さに胸が熱くなった。前へ一歩踏み出す力に
気付かせてくれるヒューマンドラマだ。

――未来屋書店　伊丹店・中尾様――

二宮敦人

最後の医者は桜を見上げて君を想う

The Last Doctors Think of You
Whenever They Look Up to Cherry Blossoms.

written by Atsuto Ninomiya

TO文庫

地域基幹病院、武蔵野七十字病院。三棟九階の白亜の城、その二階の外れで面談室の扉が半分ほど開いていた。

殺風景な部屋だった。机と椅子、それにホワイトボードが置かれているだけ。椅子には沈痛な表情で四人が座っている。一人は老人の患者。パジャマの上にガウンを羽織っている。残り三人は、その家族だ。老人の妻と、息子夫婦。

彼らは振り子時計のような、正確なリズムの足音が近づいてくるのを聞いていた。

「お待たせしました」

足音が面談室の前で止まる。桐子修司は扉をぐいと開き、室内に入って言った。座る時に白衣の袖がふわりと揺れる。小柄な体躯に白い肌、色素の薄い虹彩。中性的で、時折どこか淡い印象を醸し出すその医者は、四人の顔をざっと見るなり「面談をご希望の橋田さんと、そのご家族ですね。桐子です」と言った。

「はい、先生、あの……」

「御用件は、病状と今後の経過について確認したいということでしたね」

世間話の一つもなかった。いきなりずばりと核心に踏み込まれ、四人は息を呑む。桐子はそのまま、何の躊躇もなく告げた。

「カルテ拝見しました。現状より良くなる可能性はほぼないと言ってよいです。橋田さんはご高齢ということもありますので、余命は半年前後かと。あとはどこまで引き延ばすかですね」

「えっ……」

あまりのことに絶句する家族をよそに、桐子は老人の目を覗き込んで聞いた。

「橋田さんは、どう死にたいですか？　抗がん剤を使えば余命は数か月延ばせると思います。ただ、それは入院しながらの数か月ですが。完全に緩和ケアにシフトし、残りの時間を有意義に使うのも一つの方法ですね」

「ま、待ってください！」

隣で聞いていた息子が身を乗り出す。

「今、抗がん剤治療を行っていて……主治医の方には、少しずつ数値は良くなっていると聞いているんですが」

桐子は紙資料を覗き込む。

「そうですね。悪くはなっていません。ですがこの反応では、寛解など望むべくもありません。医学的には、もう手の打ちようはないんですよ。今行っているのは奇跡を祈りながらの時間稼ぎ、というのが本質でしょうか」

「そんな、そんな！　だって父は、ようやく夢だった船の免許を取って……自分の時間だってできるようになって。これからなんですよ。何とかならないんですか」

「なりません。何とかなるなら、その方法を言います」

「でも！　よく聞きますよ、キノコのエキスが効くとか、陽子線治療とか、あとは、その、ハーブとか……何か、何かないんですか？　ちゃんと検討したんですか？」

「ありません。きちんと科学的根拠があり、かつ有効だと思われるのが現在投与中の抗がん剤です。そして、その抗がん剤では病気の進行は食い止められない。それだけの話です。もう、死ぬ死なないという議論の段階ではないんですよ、時間の無駄。死ぬのは決定事項。来年、お父さんはいないんです。死ぬまでに僅(わず)かに残された時間をどう使うか。それを検討しませんか。僕も専門家として、できる限りの協力をさせていただきます」

「あ、あなた！　言うに事欠いてっ……死ぬだなんて。うちのお父さんに何てこと言うんですか。どんな難病でも相談に乗ってくれるお医者さんがいるって聞いたから、わざわざ来たんですよ。藁(わら)にもすがる思いで。なのに、そんな言い方、あんまりですっ……」

今度は妻が目を真っ赤にして言った。桐子は怪訝(けげん)な顔で首を傾げてから続ける。

「大事な人なんですよね？」

「当たり前です！」

「大事な人だからこそ、真剣にその死に向き合うべきだと僕は思いますが」

その冷めた口調の一言が、家族の逆鱗(げきりん)に触れた。

それぞれが、青筋を立ててがなりたてる。面談室は喧騒(けんそう)に包まれた。桐子は眉(まゆ)一つ動かさず、眼前の光景をまるで芝居でも見るように眺めている。なぜこの人たちがここまで騒ぐのか、理解できないとばかりに。

そんな中、患者本人だけが。

蒼白(そうはく)な表情で俯(うつむ)き、黙り込んでいた。

外はいい天気だが、風が強い。揺れるプラタナスの木を眺めながら、福原雅和は大股で渡り廊下を歩いていた。健康的に日焼けし、逞しく引き締まったその長身、端正な顔に意思の強さを感じさせる瞳。時折すれ違う職員や患者に会釈しながら、真っすぐに進んでいく。

「人の気も知らないで！　もう、こんな病院には来ません！」

突然怒鳴り声が響き渡った。福原が目をやると、北棟の面談室から家族連れが飛び出してくるところだった。顔を赤くして怒っている。女性の一人は泣き腫らして顔を覆い、男性に肩を貸されてやっと歩いていた。

「どうしました？」

福原は急いで駆け寄る。

女性は、近づいてきた大柄な男を見てぎょっとしたが、その胸の名札に「外科医　福原雅和」とあるのを見るや、すがりつくようにして言った。

「おたくのお医者さんが。うちのお父さんは死ぬって言うんです」

「何ですって」

「何度も何度も、死ぬって。そんな風に言われたら、治るものも治りませんよ……お医者さんに見放されたら、私たちはもうおしまいです。見捨てるつもりなんですか。苦しんでいる患者を」

「落ち着いてください。ええと、あなたは……血液内科に入院中の橋田さんですね。現在は確か、ＩＣ療法の一クール目ですか」

福原は女性を抱きかかえ、パジャマの患者を見て言った。

「ご存知なんですか」

橋田氏の息子は、初めて会った医者が病状を把握していたことに少なからず驚いたようだった。

「副院長という立場上、ざっくりとですが病棟の患者は頭に入れるようにしているんです」

「副院長……？」

福原はせいぜい三十台前半にしか見えない。大病院の副院長にしてはずいぶん若いと思ったのだろう、橋田氏の息子は目を白黒させた。

「そういえば、聞いたことがあります。七十字の外科には、奇跡の手と言われる医者がいるって。難病の患者を立て続けに救って、異例の出世で副院長になったとか」

「いえ、私はまだまだ修行中です。父がここの院長なもので、まあ早いうちから勉強させようということでしょう。それよりも、ご迷惑をおかけしました。すぐに改めて面談をさせていただきます。君、主治医を呼んでくれる？　血液内科の赤園（あかぞの）君だ」

通りすがった看護師に言い、福原は橋田氏に肩を貸して車椅子に座らせた。看護師は頷くと、早足でナースステーションへと入った。

福原は立ち上がる。見上げるほど大きく、頼もしい姿だった。
「面談には私も同席します。私は外科なので畑違いではありますが、何か手伝えることがあるかもしれません。一緒に病気と戦わせてください」
燃えるような目が、橋田に向けられる。
「橋田さん、諦めてはなりません。医者をやってると、奇跡を目の当たりにすることが実際にあるんです。奇跡は起こるんです。いや、起こしましょう」
背後で扉が開いた。
桐子修司が面談室から出てきたところだった。紙資料をまとめて小脇に抱え、車椅子の橋田氏、家族、そして福原を一瞥する。
「お大事にどうぞ」
それだけ言うと桐子は踵を返して歩き出した。振り子時計のような規則正しい足音が遠ざかっていく。
橋田氏の妻がその背を指さし、泣き声で言った。
「あの……あの人です。ひどいことを言った人は」
「重ね重ね、申し訳ありません」
「何なんですか、あの人は。あのお医者さんは」
福原が苦虫を噛み潰したような顔で、言った。
「皮膚科の桐子修司。当院の問題人物です」

第一章　とある会社員の死

八月十二日

病気とは無縁な人生を送ってきた浜山雄吾（はまやまゆうご）にとって、大病院はまるで異世界だった。まるで百貨店のように広大な待合室に、たくさんの人間が座っている。

あまり待つのは嫌だな。早く済ませて仕事に戻りたい。

血液内科外来というところにどう歩けば辿りつくのかもわからず、何度も院内図を確認してエスカレーターに乗る。天井に引かれたレールの上を、四角い白い箱がゆっくりと動いていた。カルテでも運んでいるのだろうか。何もかもが物珍しくて、浜山はあたりを見回した。洗いたてのワイシャツの襟（えり）が首に当たる。糊（のり）の効いたパリッとした感触が心地よかった。

名前を呼ばれて診察室に入る。

「よろしくお願いします」

ベッドが一つ。患者用の椅子が一つ。かすかに漂ってくる消毒薬の香り。白衣の若い医者が浜山を見て座っていた。大きい顔に対しアンバランスなほど小さな目は、分厚い黒縁眼鏡による錯覚だろうか。もしくは、その上で存在感を示している太く黒い眉のためか。胸のプレートには「赤園」と名前があった。

あまり美男子とは言えないが、誠実そうではあるな。浜山は勝手にそんなことを思った。

「検査の結果ですが、白血病です」

赤園は厚い唇をどこか不器用に動かし、小さな声でぼそりと言った。

「……え？」

しばらく沈黙が続いた。

外は眩しいほどの晴天で、街路樹の影が鮮やかなコントラストを描き出している。蝉の声は屋内までも響き、聞いているだけで汗が出そうだ。浜山はただ茫然と、医者の顔を見つめていた。

「浜山さんは、会社にお勤めなんですよね」

赤園は眼鏡をくいと上げる。

「あ、はい。今日もこれから客先で打ち合わせがあります」

「じゃ、すみませんがお休みしてもらえますか。すぐ入院しましょう。幸い病棟に空きがあるようですので、そこに」

「え、入院？　今すぐ？」

赤園は頷く。浜山が身を乗り出した時、椅子ががたんと鳴った。
「ですが今日のプレゼンは三か月前から準備してきたものですし、私が急に欠席というわけにはいきません。数日だけ、いえ今日だけ何とかなりませんか。薬とか、点滴とかで」
「ええと、放置すれば数日で死ぬこともある病気なんですよ」
「え……？」
「いいですか。よく聞いてください。無理にお仕事をされますと、今日のうちに死ぬかもしれません。これは誇張でも何でもありませんよ。本当に、危険な状態なんです」
「そんな……でも、そんなに具合が悪い感じはしませんけど」
「うーん……」
赤園は困ったように手元に目を落とした。そして一枚の紙を取り出して見せる。
「どうしてもとおっしゃるなら、自己責任でお仕事していただいても構いません。ただ、リスクはご承知との旨、この念書にサインをお願いすることになるんですが、よろしいですか」
「念書……？」
浜山は念書と赤園の顔を交互に見た。
今日死ぬだって？　俺が？　そんな病気があり得るのか？
まるで狐に化かされているような気分だった。だが向けられている赤園の目があくまで真剣であると気づくと、膝が震えた。

どうなっちゃうんだよ、俺……。

そのまま椅子に座り込み、頼るように医者を見上げた。

「せ、先生。どうしたらいいんですか」

「大丈夫です、ちゃんと治療法は確立されていますから。ええと、まずですね、このあたりに中心静脈カテーテル、という管を入れます」

赤園は首と鎖骨の間あたりを指さして続ける。

「そこから抗がん剤というお薬を投与しまして、これで異常な細胞をやっつけるわけです。そうして、まずは寛解という状態へと持っていくのが当面の目標になります。そうですね、入院期間は二か月少々といったところでしょうか」

「二か月ですって？　そんなに？」

「はい。でも心配しないでください、白血病は今は治る病気ですからね。完治目指して頑張りましょう」

赤園はそう言って、元気づけるように歯を見せて笑った。あまり自然な笑いとは言えず、浜山にはむしろ不気味に感じられた。

「もう少し詳しく説明しますと、浜山さんの血液は……」

紙にペンで図を描く赤園の後ろでは看護師が歩き回っている。病床の確保、レントゲンの予約、などといった言葉が聞こえてくる。

今日まで順調に時を刻んでいた歯車が、突如として取り外されたのを感じた。

そして同時に、全く別の異質な何かが、浜山を乗せて動き出した。
極めて静かに重々しく。

「マジすか？　浜さん、白血病？　あれって癌なんですよね？」
電話の向こうで、部下の堂島が素っ頓狂な声を上げた。
「ああ……血液の癌だって、医者は言ってた」
総合病院の一階待合ホールは広い。行きかう人の数も多く、騒がしい。浜山は受話器をもう少し耳に近づける。
「ですよね。ドラマで見ましたもん。でも、こんなに急になるもんなんですか？」
「俺の場合、急性骨髄性白血病と言って、進行が速いらしい。それも癌細胞が骨髄の中から溢れ出して、既に全身に回っている状態だそうだ……」
浜山は自分で言いながら、寒気を感じた。
俺の骨の中心部には、異常な細胞がたっぷり詰まっているのだ。奴らは増殖し、正常な細胞を圧迫して、どんどん減らしている。それに飽き足らず、骨髄から血流に乗って流れ出し、体中を蠢いている。俺の腹にも、足にも、指先にも。
想像すると不気味で仕方なかった。
「わかりました。例のプレゼンは任せといてください。こっちでうまくやりますから」
「え？」

「だって入院になりますよね？」
「あ、ああ。そう言われた。すまない……急な連絡で」
「何言ってんですか、浜さん。白血病ですよ。会社の心配してる場合じゃありません。大丈夫です。浜さんいなくたって平気ですよ、自分や西尾で回します。入院は、クリーンルームですか？」
「いや、しばらくは一般病棟だそうだ」
「ならお見舞いにも行けますね。落ち着いたら受注の報告をお土産に、チームのみんなで行きますから。闘病頑張ってください。では」
「ああ。ありがとう」
電話は切れた。緑色の公衆電話に受話器を戻して、浜山はふうと息を吐いた。
俺がいなくても大丈夫か。堂島は元気づけようとして言ったのだろうが、逆に悲しい。
しかしあいつ、よく知ってたな。テレビドラマで見たんだろうか。白血病の罹患率は年間で十万人あたり六・三人だと聞いた。確率は〇・〇〇六三パーセント。俺だって、ドラマの世界の病気だと思ってたよ。
横の公衆電話では老婆がにこにこしながら誰かと話していた。迎えを呼んでいるらしい。帰ったら寿司が食べたいなどと言っている。
少し落ち着いて考えたい気分だった。
気合いを入れて締めてきたネクタイを緩める。

浜山はプレゼン資料の入った鞄を持ち、ゆっくりとソファまで歩くと、深く腰かけた。ソファは四人掛けのものが無数に並んでいる。会計や案内を待つ患者が座り、週刊誌を読んだり、壁にかけられた大きなテレビを茫然と眺めていた。

腕を骨折している人がいる。マスクをして咳をしている人もいる。子供を連れた母親がいる、眼帯を付けた若者がいる。彼らは束の間病院に訪れ、診察を受けてはすぐに外へと帰っていく。

俺だってそのつもりだった。

少し肩の付け根が痛くて、体がだるく、たまに息切れがあった。ちょっとした体調不良。休日出勤と残業が続いているから、仕方がないことだと思っていた。症状は治ったり、ぶり返したりしながら、ついに昨日は熱が出た。妻にお尻を叩かれ、病院で薬だけ貰おうと思ってやってきた……。

なのに、なぜ。

なぜ俺が。

もらった処方箋を片手に、腕時計を見ながら外に出て行くOL風の女性がいる。自動ドアが開き、女性を送り出してまた閉じた。

俺は仕事に行かない。行かなくていいんだ。こんな真昼間から、テレビを見ている。明日も明後日も、一か月も二か月も。

途方に暮れそうだった。小学校の時、休校日に間違って来てしまったような、そんな心

細さを思い出す。世の中が自分を無視して動いているようだ。
鞄の中の名刺入れが、弁当が、手帳が、悲しかった。
浜山は鞄を開き、資料を取り出した。プレゼンに備えて昨日何度も読み込んだそれは、赤で無数の書き込みが加えられ、折れ目が付いてぼろぼろになっている。意味もなく資料に目を落とす。無意味だと知っていながら、ページをめくる。
とにかく時間が欲しかった。静かに考えたい気分だった。
仕事の関係者には連絡を入れた。問題は妻だ。
妊娠六か月の妻にどう伝えればいいのか。
もう少し考えなければ、とても思いつきそうになかった。

「白血病の治療方針は『トータル・セル・キル』というものです」
主治医の赤園は黒縁眼鏡の奥で目をしばたたかせながら、のそりと立ち上がる。そしてホワイトボードに細胞の絵をいくつか描き、その上に大きく×印を付けた。
「つまり血中の細胞（セル）を全滅させるということです。正常細胞も、異常細胞も」
「ぜ、全滅ですって……」
「浜山さんの癌細胞は今、自由に血の中を泳ぎまわっています。細かい癌細胞を一つ一つ選別してやっつけることはできません。そして癌細胞は一つでも撃ち漏らせば再び増殖してしまいます。ですから犠牲は覚悟の上で、強力な抗がん剤を投与します。正常細胞もろ

とも根こそぎ死滅させるのです。癌細胞がいなくなるまで」

赤園は淡々と、説明を行う。その声がぼそぼそと無機質な面談室に響き渡る。浜山は震えながら聞いた。

「そんなことをしたら、俺の血はなくなってしまうんじゃありませんか」

「なくなりはしませんが、血球の数は激減します。なのでその分を輸血などで補わなくてはなりません。また、一時的にばい菌への抵抗力が失われてしまいます」

「どうなるんですか」

「普通ならちょっとした風邪ですむような病気も、命にかかわる症状になってしまうんです。ですから衛生には十分気をつけましょう。食事前、トイレ後のうがい、手洗いは欠かさずに。何かに触れたら必ず手を消毒。血球数が一定量を切ったら、無菌室という特別に隔離したお部屋に移っていただくこともあります」

「クリーンルームってやつですか」

「あ、ご存知でしたか。まさにそれです。ただ、無菌室では面会はご家族のみ、一日一時間までとさせていただいてますので、ご了承ください」

「……はい……」

「さて、処方するお薬ですが。抗がん剤はアンソラサイクリン系という、まあ実績のあるお薬ですね……それから場合によっては利尿剤と強心剤、輸血は血小板を……」

赤園は薬について説明し、一通り話し終わるとこちらを見た。

「何かご質問はありますか？」
浜山は口ごもる。口の中がカラカラだった。
「あの……」
言ったところで咳が出た。それを見て察したように、赤園が口を開く。
「ああ、副作用について説明をしていませんでしたね。抗がん剤は強いお薬ですので、やはり副作用があります。聞いたことがあるかもしれませんが……まずは脱毛。それから口内炎、吐き気、下痢などです。しんどいかもしれませんが……浜山さんが苦しんだ分だけ、癌もやっつけているわけなので、頑張っていきましょう。私も吐き気止めなど処方して、サポートしますので」
「いえ、あの」
「はい？」
浜山はもう一度咳をし、そしておそるおそる聞いた。
「あの……治るんですよね」
赤園は虚を突かれたような表情をする。
「治るんですよね。その、トータル・セル・キルですか……それをやれば、治るんですよね。俺、死なないですよね」
赤園は笑った。
「あ、ええと、基本的に治ります。言ったじゃないですか。白血病は、今は治る病気なん

です。完治した人だっていっぱいいますよ」
浜山も釣られて笑う。それを見てか、赤園は口を滑らせた。
「ほとんどの人が、このやり方で寛解まで持ち込めていますからね」
「ほとんどの人……？」
浜山の口端が引きつった。
「ほとんどって、どれくらいですか」
赤園が口を閉じ、一瞬だけ無表情になった。その眼鏡の奥の目が、浜山をぼんやりと見る。それから再び笑みを浮かべ、言った。
「ええと、約八十パーセントです」
五人に四人。
浜山は、冷たく静かに背中に汗が流れるのを感じた。

五人に四人。五回に四度。それは、果たしてくぐり抜けられる確率だろうか。血液内科の大部屋、ベッドに寝転んで浜山は天井を見つめていた。扉が開き、点滴棒を引きながら痩せた老人が室内に入ってくる。
先ほど軽く雑談した仲なので、浜山は会釈した。彼もまた、急性骨髄性白血病（AML）だと言っていた。
老人は大きな息を吐き、いかにも億劫そうに自分のベッドに身を横たえた。

この大部屋には六人の患者がいる。つまり、この部屋で一人は治らないのだ。治らなかったらどうなるんだ？　治らないって、どういうことだ？　それってつまり、死……。

恐ろしくて、赤園に確認することはできなかった。

ふと、入口に不安そうな顔が見えた。細面の女性が首を伸ばして覗き込み、病室の中を窺っている。

「おう」

浜山は手を振った。

取るものも取りあえず駆けつけてきたのだろう、髪がぼさぼさの女性は浜山を見てほっと息をつくと、垂れた目を細めて弱々しく笑った。浜山も、同じように笑った。

女性は大きく膨らんだ腹を抱えるようにしてベッドサイドの椅子に腰かける。浜山はカーテンを引き、口元を緩めて妻の腹に触れた。

「京子。悪いけどスーツ、持って帰ってくれるか」

浜山はつとめて明るい声で言い、脇のハンガーにかけたスーツと、朝に着て昼脱いだばかりのワイシャツを示す。京子は大人しく頷いた。

「しばらく着ないからな。クリーニング、しといてくれ。退院する頃には秋だ。いや、その腹じゃ持って帰るのは大変か。じゃあ郵送するから受け取りを頼む」

「ねえ、雄吾。そんなことより、あなた……」

「ん？　そうだ、次の健診はいつだっけか」

「健診は来週」
「そっかそっか。次こそ一緒に行こうと思ってたんだけど、悪いな。行けなくなっちまった。エコーだっけ？　あれで見るの、楽しみにしてたんだけどなあ」
「……」
京子は眉じりを下げて浜山を見つめていた。その悲痛な表情を見て、浜山は反射的に笑顔を作る。
「どうした？　そんな顔すんな、大丈夫だよ。それより治療費だよな、保険にでも入っておけば良かったな、まさかこんな病気想像もしてなかったし」
「雄吾……」
「なんだよ、電話で言ったろ？　今は治る病気なんだって、センセイが言ってくれたんだ。心配すんなよ」
京子は浜山の言葉には答えなかった。ただ、まばたきもせずに浜山を見上げ、その人差し指をすっと差し出して頬に触れた。
「あ……」
冷たかった。いや、温かかった。その不思議な感触で、ようやく気づいた。
「俺……泣いて……」
慌てて俯き、病院服で目を拭う。音もなく流れていた涙が、裾を染める。手が震えていた。唇がかじかんでいた。歯の奥が、かちかちと鳴っていた。

背後から温もりが覆いかぶさってくる。京子だった。京子が、俺を抱いてくれている。
「一番怖がってるの、あんたの癖に。強がらなくていいの」
「……うるさいな」
くそ。こいつには敵わない。
「わかるよ。驚いちゃったんだよね。今日までずっと、普通に過ごしてきたのに……急にこんなことになって、入院なんて、びっくりしちゃったんだよね。雄吾って、そういう人だもん」
ぽん、ぽん。ゆっくりと一定のリズムで、京子が背中を優しく叩いてくれる。それは不思議と心を落ち着かせた。叩かれるたびに、そのたびに、悪いものが体から消え去っていくような気がした。
「……だってよ。プレゼン……俺……」
声がまともに出ない。
浜山はまるで子供のように嗚咽していた。
「わかってる。頑張ってたもんね。ずっと前から、毎日遅くまで準備してたの、知ってる。私は、知ってる」
京子はゆっくり浜山に合わせて言う。浜山はしゃくりあげながら、歪む視界を睨み付けながら、必死で言葉を紡ぐ。ぽたぽたと熱い涙がベッドに落ちた。
「……それに、俺……」

「ん？」
「俺ッ……お前に子供……のに、こんな……してる場合じゃ……」
「大丈夫。全部、大丈夫」
京子は四つも年下の癖に、こういう時は不思議に頼もしい。これが母性なのだろうか。寄り掛かればそのままどこまでも受け止めてくれそうな、温かさと優しさ。それに比べて俺は何て頼りないんだ。子供が、来年生まれてくるというのに。
男の子だって、つい二日前にわかった。
昨日から、名前を考え始めた。
そして今日、俺は……。
「焦らないよ。大丈夫だよ。雄吾、一人じゃない。私がいるよ」
「だけど、俺……」
顔がくしゃくしゃになっているのが自分でわかった。自分でも正視に耐えないだろう顔を、京子が掴んで持ち上げる。そして正面から見つめ合う。
「一緒に頑張ろう。ね、今までだってそうやってきたじゃない。あなたが事故を起こした時も、私が鬱になった時も。ね、何とかなって来たじゃない」
京子の大きな黒い瞳の中で、自分がまばたきしている。
「一緒に治そう。二人なら、大丈夫。ね。一人で抱えないで、何でも相談してね」
京子がにっこりと笑う。その唇が、震えるほど愛しく思えた。

感染症には気をつけろと言われていた。肉体的接触はできるだけ避けるようにと言われていた。だから浜山は指を伸ばした。

京子の唇に指で触れる。京子は逃げようともせず、それを受け入れた。触れ、撫で続けている間、唇はずっとそこにいた。なぜか出会ったばかりの頃を思い出す。

体の震えが、少しだけ治まった。

comment

最後の医者は桜を見上げて君を想う

とてもとても重い作品で、死ぬ事について
何度も考えさせられました。その中で
最後の最後に一粒だけ用意されていた
小さな希望に私は自然に涙していました。

―― TSUTAYA商品企画プロデューサー・栗俣様 ――

「あなたは大切な人の余命を知った時、
どうしますか？」対立する2人の医者を通して
命の重さを考えさせられました。

―― 紀伊国屋書店　新宿本店・宮本様 ――

死の恐怖が安らぎと受容に変わったとき、
本当に生きる意味とは何なのか、
迷いながらも最後まで戦い抜いた患者、
医師達に涙があふれました。

―― 伊吉書店　類家店・上道様 ――

医者達が織りなす「生」についての物語は
考えさせられる部分が多く、
ラストは涙が止まりませんでした。

―― オリオン書房　ノルテ店・澤村様 ――

医師達の「本気」が文字から浮かびあがって
くるようでした。彼らは本当に、強い。
人間讃歌とはこのような作品のことを
指すのではないでしょうか。

―― 宮脇書店　本店・藤村様 ――

著者の集大成的なこの作品は
涙がこぼれる場面が多々ありますので
通勤・通学中に読まれる方はご注意ください。

―― 福岡金文堂　姪浜南店・林田様 ――

恋のヒペリカムでは悲しみが続かない

Hypericum

Atsuto Ninomiya

二宮敦人

TO文庫

Your sorrow melts away in the club,
HYPERICUM
named after the flower of "sparkle",
where people in
love gather.

—上—

藤堂律子がお弁当箱を開くと、大きなおにぎりが二つ並んでいた。
両方とも中身は鮭だとわかっている。律子自身が握ったのだから当然だ。それでも何となく左右を見比べてから、右を選んで手に取った。食べながらいつものようにかちゃかちゃとキーボードを叩き、一つずつメールの返信をしていく。ファッションブランドの女社長と言えば格好いいが、実際の仕事は地味な作業の繰り返し。
そんな時、共同経営者でもある森田奈美がサンドイッチをかじりつつ宣言した。
「ホストクラブに行きたい」
社員の一人がコンビニのうどんをすすりながら眉をひそめる。
「奈美、またそういう話？」
「いいクラブがあるって聞いたの。知り合いが行ったらしいんだけど、凄いんだって」
律子たちのオフィスは小さなビルの二階にある。さほど広いとはいえない空間に本棚、ファイル棚、打ち合わせスペースが一つ、そして五つのデスク、つまり社員全員分、が押し込められている。メンバーはみな女性、うち三人は学生時代からの友達だったから、いつも女子会のような雰囲気であった。
「はいはい、知り合いね」
「何さ」
「奈美の話に出てくる知り合いって、実は奈美自身だったりするじゃん。またそうやって、自分の行きたいクラブに誘ってるだけなんじゃないの」

「こ、こないだはそうだったけど、今回は違う！」
奈美は顔を赤くする。
「ちゃんと実在する知り合いなの、高校の友達。最近職場の人と結婚した！　何なら写真も見る？」
「まあいいけど。で、凄いって、何が凄いの」
「金額が凄いとか」
律子はぼーっとウーロン茶をストローですすりながら、みんなの話を聞いていた。
「まずは内装が凄い。宮殿みたいな。それから、ホストの顔面レベルが桁違い。芸能人なんてもんじゃなくて、美術品、国宝級。見るだけで心が洗われるという……いや、まあ私が会ったわけじゃないんだけどさ。それも整形やフォトショップで誤魔化してないって話。私、ここ重要だと思うんだよね。いや、別にいいよ？　整形したって。でもね、最初から美男子だった男と、途中から美男子になった男とでは、培われた精神性が違う。私はそこも含めて愛でたいわけ」
「奈美はイケメンの話になると饒舌になるよね」
「いいから、とにかく最後まで聞いてよ。でね、もちろん一緒にお酒を飲んでも楽しいんだけど、そのホストクラブが凄いのはここから。なんと、不思議な神通力があるらしいのよ！」
これには全員が唖然とする。律子の口からもストローがぽろりと落ちた。奈美だけが

喜々として話し続けた。
「その知り合いの悩み事ってのが、まさに彼氏との結婚だったの。ホストクラブのおかげでゴールインできたんだよ、凄くない？　とにかく、そこのスタッフに相談してしばらくすると、恋が成就するらしいのよ。他にも誰かとの縁を切って欲しいとか、生き別れになった兄弟を捜してくださいとか、国家試験に合格しますようにとか、もう要望次第で何でも……」
「それ、ホストクラブじゃないよ」
食べ終わったバナナの皮を几帳面にたたみながら、社員の一人が言った。
「神社かパワースポットの間違い」
「いや、なぜかホストクラブなんだって」
「意味がわかんない」
「だから夢があるんじゃん」
「で、どこにあるの、その神社」
「ホストクラブだって！　それがさあ、場所を教えてくれないんだよね。遊び半分で行くところじゃない、人生に本当に必要になったら教えてあげるって。ホストクラブでしょ？遊びに行かないで何しに行くの。っていうかホストが人生に本当に必要になるときって何。それってもう、何かが手遅れじゃないの？」
奈美は立ち上がり、バンとテーブルを叩き、また座ると肩を落とした。一人で盛り上が

っている彼女を、社員たちは遠巻きに見つめている。
「……行ってみたい。でも、見つからないの。繁華街のキャッチに聞いても誰も知らない。お姉さん、からかってます？　って言われちゃってさ……」
深く考え込む奈美をよそに、社員たちは休憩を切り上げ始める。
「社長、紅茶淹れるけど飲む？」
「ううん、大丈夫」
「私そろそろ打ち合わせあるから行こうかな」
みんなの関心がすでに離れつつある中、奈美だけが切実な表情で繰り返した。
「ねえ。誰か一緒に捜して、行ってみない？」
律子は黒のショートカットを軽くかき上げ、分厚い銀縁眼鏡に指先でちょんと触れる。ちらりと鏡を見て、一分の隙もない己のスーツ姿を確かめてから、口を開いた。
「奈美。そういう遊びはほどほどにした方がいいよ。行くとしても十分気をつけてね」
「律子はいつもそう言う。あのね、ホストクラブって別に怖いところじゃないから」
「だって……悪い男に騙されて、高いお金を払わされるんだよ」
「そんなの、ごく一部の話。ぼったくりバーと勘違いしてない？」
「でも、もし奈美がそういう目に遭ったらと思うと心配なんだもの」
「そりゃありがたいけどさ、イケメンを拝みに行くのも女の子の幸せのうちだと思わない？」

「遠くから見る程度なら、まあ……」
話が噛み合わない、という顔を奈美と律子は互いに向け合う。
「ま、要するに金をぼったくられるのが心配ってわけでしょ」
奈美は話を変えた。
「その金を払うために借金して風俗に落ちると思ってるんでしょ。問題ありません。そのクラブ、超格安だそうです」
「いくらくらい」
「それがさあ……」
八重歯を見せてにんまり笑いながら、奈美は律子のデスクの周りをくるりと回る。思わせぶりにもほどがある。
「無料なんだって。タダ」
ふうむ。
律子はそっと奈美の額に手を当て、自分の額と比べてみる。
「いや、熱出してるとかじゃないから」
確かに平熱のようだけれど。だが、目が腫れぼったい。少々化粧のノリも悪いようだ。そういった症状に加えて、都合の良い妄想が引き起こされる病気があるのかもしれない。
本棚から「家庭の医学」を取り、めくり始める律子に奈美が追いすがる。
「もう、どうして信じないのお」

「だってありえないもん。もし本当だとしても最初だけサービス価格で、後からむしり取る仕組みなんだよ、きっと」
「疑り深いなあ」
「この世に美味しい話はないよ。美男とか美女って、いわば一種の無形財なわけでしょう。希少性によって価格が決まり、排除性と競合性を兼ね備えた私的財」
「ああ、もう。経済学部はすぐそうやって難しいこと言う。もっと素直な気持ちで楽しめばいいのに」
「素直にって、どういう気持ちなの」
にこにこ笑って奈美が答える。
「仮に騙されたとしても、イケメンというありがたい神様にお布施ができたと考えればいいじゃん。むしろ儲けたようなものでしょ？」
律子は奈美の能天気な顔をじっと見つめ、溜め息をつく。
やはり、話が噛み合わない。

第一章

　好きでイケメンに生まれたわけじゃない。
　檜山浩一は洗面台に立ち、上半身裸で鏡に向き合いながら、金に染めた髪をかき上げた。洗顔で軽く濡れた髪と整った顔は、自分でもぞくっと来るほど色っぽい。
　生前の母と話したおぼろげな記憶では、ロシア人の血が四分の一ほど入っているという。確かに日本人離れした高い鼻だ。とはいえ外連味（けれんみ）が強すぎるということもなく、つつましいバランスの範囲に収まっている。涼しげな目元、均整の取れた眉に凛々（りり）しい口、小さな顔、そして高い上背に長い足。はっきり言って文句の付け所がない。
　髪をごしゃごしゃとかき回してみる。無造作な感じが実にワイルドで、美男子だった。きちんと纏（まと）めて櫛（くし）を入れ、テカテカの七三分けにしてみる。滑稽（こっけい）の手前でぎりぎり踏みとどまったバランスがまた絶妙で、これはこれでやはり美男子だった。何をどうしようが、美男子は美男子。
　あほくさ。
　檜山は櫛を放り出した。それからガラス瓶から化粧水を手に取り、顔にまぶしたのち首と耳の裏にもそっと指先で伸ばした。すっかり朝の習慣になっている。

玄関の扉を開くと雲一つない快晴である。気分は悪くないが、やはり俯(うつむ)いて歩ける雨の日の方が好きだ。今日は燃えるゴミの日だったな。玄関脇のゴミ袋を担ぎ上げる。中身はほとんど紙切れなのだが、たっぷり詰まっているので結構重い。

ゴミ捨て場まで持って行き、袋をぽんと置いたところで声をかけられた。

「すみません、あの……」

「はい」

制服を着た女子高生だ。黒髪をポニーテールにしている。容姿は十人並みというか、まあ良くある感じ。嫌な予感がする。

「私たち、いつも朝、すれ違いますよね。ずっと見てました」

「はい」

檜山はやや投げやりに答える。向こうからすれば俺は目立つのだろうけれど、こちらからすれば他の女に埋没した存在に過ぎない。

「これ、良かったら読んでください。失礼します」

強引に檜山の手に封筒を握らせると、女子高生は顔を真っ赤にして走り去っていった。

溜め息を一つ。

動物のプリントされた可愛らしいデザインの封筒は、きらきら光る星形のシールで封がされている。宛名には「名前も知らない貴方(あなた)へ」と、子供っぽい字で書かれていた。末尾にはピンクのペンで小さなハートマークまで描かれている。

やれやれ。たった今捨てたばかりなのに。

檜山はあたりを見回し、誰もいないことを確認すると、手紙を中心から真っ二つに破った。さらに重ねてもう一度破る。細かい破片にしてからさっき出したゴミ袋を開いて、中に放り込んだ。他の手紙の破片と一緒にして、また閉じた。

comment

恋のヒペリカムでは悲しみが続かない

①この作品は登場人物の小さな感情の変化さえも全て読者に伝え物語だからこその「感動」を与えてくれる。読んだ人を少しだけ救ってくれるような優しい作品だ。
②この本は、作中の登場人物の彼女のように読者の悲しみすら癒してくれる。こんなにも**優しいエンターテイメント**を他に私は知らない。

―― TSUTAYA商品企画プロデューサー・栗俣様 ――

〝どんな悩み事も解決してくれる〟
そんな噂のたつクラブヒペリカムには
不思議と恋の悩みをもつ男女が訪れる。
あなたも訪れて下さい。
きっと幸せになれるはず。

―― 紀伊国屋書店　新宿本店・宮本様 ――

過去の自分と向き合い、今の自分を受けいれる勇気をくれ、逃げずに前に進めるように寄り添ってくれそうな**ヒペリカムに行ってみたい**。

―― TSUTAYA　天神ショッパーズ福岡・清水様 ――

人を救うことができるのは完璧な人ではなくて、不完全な人の方ではないのだろうか。
魅力的なキャラクターが紡ぐ優しい物語だと思いました。

―― 蔦屋書店　熊本三年坂店・椛山様 ――

多彩な関係性での駆け引き。
内面での葛藤。そして実際の行動描写。
状況は違うが、自分自身と重なる不思議さ。
非常に面白い作品です。

―― TSUTAYA　イオンタウン郡山店・渡辺様 ――

二宮敦人（にのみや・あつと）

1985年東京都生まれ。一橋大学経済学部卒業。
代表作『最後の医者は桜を見上げて君を想う』等、
フィクションとノンフィクションの垣根を越えて活躍、
著者に『18禁日記』『最後の秘境 東京藝大:天才たちのカオスな日常』
『紳士と淑女のコロシアム「競技ダンス」へようこそ』等がある。

二宮敦人の本

- 18禁日記
- 郵便配達人シリーズ
  - 花木瞳子が盗み見る
  - 花木瞳子が仰ぎ見る
  - 花木瞳子が顧り見る
  - 花木瞳子が望み見る
- 最後の医者は桜を見上げて君を想う
- 最後の医者は雨上がりの空に君を願う　上・下
- 恋のヒペリカムでは悲しみが続かない　上・下
- 悪鬼のウイルス
- ドールハウスの人々
- 小指物語
- 夜までに帰宅
- 僕が殺しました×7
- 四段式狂気
- 殺人鬼狩り
- ある殺人鬼の独白
- さよなら、転生物語

各カバーイラスト：syo5
各カバーデザイン：川谷康久（川谷デザイン）